



## 第35回書学書道史学会大会を終えて

萱 のり子

令和7年10月25日(土)・26日(日)、奈良教育大学講堂を会場として第35回書学書道史学会大会が開催されました。初日の小雨は幸い大きな天候の崩れにいたらず、穏やかな日となりました。学会員の参加に加え、奈良教育大学書道科の学生および地域の参加者を特別に許可いただいたことで、両日あわせて212名(うちオンライン26名)の参加がありました。

会場校として準備を進める間、会員の方々には奈良ならではの書文化を、未来へ向かう学生たちには学術研究の刺激を、地域の方々には書文化交流の活性を、是非とも感じ取ってもらえる大会にしたいという思いがありました。関係各位のご理解・協力のもと、開催にいたりまし

●書学書道史学会

# 会 報

第 50 号

令和8年(2026)1月15日発行

編集・発行

書学書道史学会

広報局

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル7F

(株)毎日学術フォーラム内

TEL (03)6267-4550

FAX (03)6267-4555

MAIL maf-syogaku@mynavi.jp

たことに厚くお礼を申し上げます。

初日には奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長の馬場基氏を外部講師としてお招きし、シンポジウム「簡牘にみる書文化の源流」を催しました。中国簡牘については会員の福田哲之氏・井田明宏氏より最新の研究成果を提供いただき、馬場基氏には朝鮮半島・日本の木簡研究の現況を報告いただくことで、東アジア文化としての「書」について考える機会となりました。

2日目の記念講演は、奈良国立博物館名誉館員の西山厚氏が「聖武天皇の書と光明皇后の書」をテーマにお話くださいました。講演の中では、本年度開催の正倉院展に出陳されている、廬舎那仏の開眼に使われた筆に関する言及もあり、奈良時代から今に伝わる書文化の実相を生き生きとした言葉で届けてくださいました。

また、大会期間中の企画展示として「学び舎の筆華―奈良教育大学の書と蔵書」を教育資料館にて催しました。拓本に関しては、事前に役員各位より本学所蔵の準貴重書の中から出展品の推薦を得て、特に王羲之関係のものを展示しました。併せて、本学書道科で教鞭をとった教員の書作を展示し、近現代の肉筆を鑑賞していただきました。

研究発表は例年より多く全11件、若手中堅の発表が多数あり、時代や視点も多岐にわたっています。質疑も活発に行われ、密度の濃い展開でした。初日夕刻からの懇親会には学生会員含む76名の参加があり、賑やかな交流の一時になりました。

奈良は今日も墨や筆などの産地ですが、地域産業を支えるマンパワーは必ずしも十分ではありません。大会終了後、有難いことに地域参加者の方から「学術研究にふれる機会を得て、改めて環境の見直しはかれそうだ」との声が届いております。

今大会の準備から開催にいたるまで、役員ならびに関係各位に終始ご高配ご尽力を賜りました。会場においては教員間の連携のもと、大学院生を中心に協力体制を組んで、奈良教育大学の学生諸氏が連日実働を支えてくれました。皆さまのおかげをもちまして、第35回大会を盛会に開催することができましたことに心より感謝を申し上げます。有難うございました。

(編集局長・開催校責任者)

## 講演会報告

## 西山厚氏 「聖武天皇の書と光明皇后の書」

第35回大会二日目最後に、西山厚先生による講演会が開催されました。西山先生は長年にわたって奈良国立博物館に勤務され、正倉院宝物をはじめとする貴重な書跡の調査研究や展示を手掛けられました。今年で77回目となる「正倉院展」ですが、西山先生は担当者としてそのうち31回にかかり、今回のテーマである聖武天皇の書、光明皇后の書も手ずから展示されてきました。現在は同館名誉館員、帝塚山大学客員教授、東アジア仏教文化研究所代表などを務められ、文化財に関する教育や普及にもご尽力されています。

ご講演ではまず、16歳で結婚した聖武天皇と光明皇后が、やがて待望の男児を得てほだなく皇太子にしたこと、手立てを尽くしながらもその愛児を喪い、はじめてに誕生した女兒を初の女性天皇として立てたことなどからはじまり、天皇夫妻をめぐる出来事とその心情のうつろいを、史料や史跡を取り上げながら語っていただきました。東大寺の盧舎那仏を建立した聖武天皇は、開眼の詔に「動物も植物もともに栄える世の中をつくりたい」と

いう、『華嚴経』を背景にした言葉を記しています。これも天皇の愛情と責任感から発した考え方です。

この聖武天皇と光明皇后にまつわる4巻の書巻が、「国家珍宝帳」冒頭の「御袈裟」「厨子」に続いて記録されています。聖武天皇筆の「雑集」、元正天皇が書いた

とされる「孝経」、光明皇后筆の「杜家立成」と「樂毅論」がそれにあたります。先生は、これらの書がどうして毘盧遮那仏に献納され、国家の重宝とされたのかについて、詳しくお話しくださいます。

「雑集」には聖武天皇の姿勢を伝える詩文が選ばれていること。そして自らが筆を執って驚異的な集中力で書き上げたものであること。「孝経」は当時の日本人が最も重んずべき孝について説き、それを聖武天皇の実質的な母ともいえる元正天皇が揮毫したといわれるものであること。「樂毅論」と「杜家立成」は、皇后の父である藤原不比等をはじめとする藤原家にゆかりの深いものであること。皇后がこの4件の書巻を大仏様に献じたことの意味が重層的に理解できました。

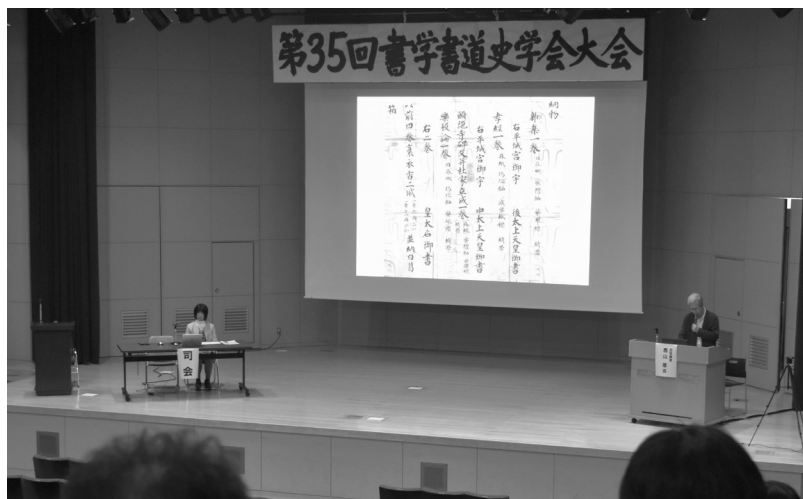
最後に、奈良市内の小学生を対象に、聖武天皇の書を通して書に親しむための活動に取り組んでいらっしゃる様子の紹介がありました。王羲之書法の系譜にある聖武天皇と光明皇后の書が、先生の活動を通して今日の文化として息づいていることがよくわかりました。文化財に対する深い理解と実践的で多様な活用方法の提示は、わたしたち会員にとって貴重な示唆となったものと思います。

(文責／広報局 高橋利郎)

広報局



西山厚氏



## 第35回大会シンポジウム報告

## 企画局

## 「簡牘にみる書文化の源流」

萱 のり子

今大会シンポジウムは標記をテーマに会場校企画として実施いたしました。パネリストとして外部講師の馬場基氏、会員の福田哲之氏、井田明宏氏に登壇いただきました3氏の基調報告を通して、東アジア文化としての書について大きな視野で考える企画となりました。シンポジウム前半は各氏による基調報告、後半はパネリスト相互の討議およびフロアとパネリストとの討議という構成です。

はじめにテーマに関わる企画の趣旨として、①環境的要因と文化生育との関係②出土系の書と「伝世」の書との関係③現代社会における文化的課題、への着眼を司会の萱より説明し、各氏の基調報告に移りました。

馬場氏の基調報告では、そもそも木簡とはどういうものを指すか、発掘し出土すること、即ち木簡が「残る」ということと条件や要因などへの言及がありました。大陸から地続きの朝鮮半島と海を隔てた日本との出土傾向の相違、両者の影響関係の有無など地理的・歴史的双方からの説明によって、中国との関係が捉えやすくなりました。地域による書写技能や書き方の差異を「身体技法」という観点からみると、個人の経験的修得の面と社会システムとしての成熟の面と

が重なりあうことが示唆されました。

福田氏の報告では、中国戦国期の書籍（戦国竹書）をめぐる、古文の実態解明に向けた最新の研究成果を紹介しつつ「書体」の認識や定義に関わる視点が提示されました。

井田氏の報告では、中国長沙市五一広

場から出土した簡牘を中心に取り上げ、後漢時代中期の書の実相を捉える視点特に楷書系・行書系という新書体の位置への考察がありました。

木簡や竹簡が出土した場所、その範囲、文字の現れを具体的に探ることで、伝播の経路や要因、さらにその脈流や源流へと体系的な研究につながる視点が見えてきます。パネリスト間の討議においては、研究のプラットフォーム共有と拡充の課題が挙がり、情報ネットワークを構築することで時代や地域の関係性を多角的に検証する意義が確認されました。個々の字姿のデータ集積により、ある特徴をもつ姿を新たに「書体」として認識したり既存の定義を再考したりすることができるようになります。

当日時間の都合で取り上げることのできなかったフロアからの質問や意見の中に、木簡・竹簡の個別具体の様子に関するものが多数あり、時代や地域による傾向や差異に関心が向けられていることが分かりました。こうした点への着眼は、研究においてだけでなく文化振興や教育普及においても重要で、現代における書文化の課題に通じています。

書文化の源流へ目を向ける今回のテーマは、昨年のシンポジウム「書の人文情報学」で提示された課題や可能性とリンクしてきます。書学書道史に関係する学際的な研究や共同研究への糸口も見えたように思われます。

（編集局長・シンポジウム司会）



馬場基氏



令和 6 年度会計決算報告書 (2024 年 4 月 1 日～ 2025 年 3 月 31 日)			令和 7 年度予算案 (2025 年 4 月 1 日～ 2026 年 3 月 31 日)		
	項 目	決 算 額		項 目	予 算 額
収入の部	個人会員会費	2,214,000	収入の部	個人会員会費	2,300,000
	団体賛助会費	200,000		団体賛助会費	300,000
	大会参加費	526,500		大会参加費	400,000
	その他の収入	41,671		その他の収入	0
	本年度収入 合計	2,982,171		本年度収入 合計	3,000,000
	前年度繰越金	8,187,928		前年度繰越金	5,494,236
	前年度未払金	△ 1,871,701			
	収入合計	9,298,398		収入合計	8,494,236
支出の部	編集局経費	742,712	支出の部	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	98,000		「学会展望」準備費	100,000
	渉外局経費	92,400		渉外局経費	80,000
	企画局経費	64,900		企画局経費	50,000
	大会運営費（企画局）	557,731		大会運営費（企画局）	400,000
	例会運営費（企画局）	18,425		例会運営費（企画局）	30,000
	講師謝金費（企画局）	150,000		講師謝金費（企画局）	130,000
	振興局経費	623,280		振興局経費	630,000
	会報編集費（広報局）	59,621		会報編集費（広報局）	60,000
	ホームページ委託費（広報局）	220,000		ホームページ委託費（広報局）	220,000
	会議費	28,500		会議費	30,000
	選挙管理委員会費	0		選挙管理委員会費	150,000
	名簿作成発行費	0		名簿作成発行費	150,000
	通信費	241,432		通信費	200,000
	事務消耗品費	88,661		事務消耗品	50,000
	事務委託費	731,500		事務委託費	800,000
	会計顧問料	55,000		会計顧問料	55,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000		東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	日本書道文化協会	30,000		日本書道文化協会	30,000
	予備費	0		予備費	4,627,236
	本年度経費 合計	3,804,162		本年度経費 合計	3,867,000
	次年度繰越金	7,619,543		次年度繰越金	0
	本年度未払金	△ 2,125,307			
	支出合計	9,298,398		支出合計	8,494,236

令和 7 年度総会報告

事務局

本年度の総会は、令和 7 年 10 月 25 日（土）、奈良教育大学講堂にて行われました。総会に先立ち、菅野智明企画局長の進行のもと大会の開会式が行われ、続いて河内利治理事長より挨拶がありました。

総会は、事務局長の司会で進行了しました。最初に、河内理事長より挨拶があり、審議においては、橋本貴朗会員を議長として進められ、いずれの議案も承認されました。

◆審議事項

（１）令和 6 年度会計決算報告、事業・活動報告、会計監査報告について

（増田知之会計局長、尾川明穂事務局局長、丸山猶計監事）

（２）令和 7 年度予算案、事業・活動計画案について

（増田知之会計局長、尾川明穂事務局局長）

（３）会則改正について

（尾川明穂事務局局長）

（４）その他

◆報告事項

（１）各局報告

①企画局（菅野智明企画局長）

②渉外局（富田 淳渉外局長）

③振興局（成田健太郎振興局長）

④編集局（萱のり子編集局長）

⑤広報局（高橋利郎広報局長）

⑥会計局（増田知之会計局長）

⑦事務局（尾川明穂事務局局長）

（２）その他

＊総会で配付した書類のうち、〈資料 1〉「令和 6 年度会計決算報告書」、〈資料 4〉「令和 7 年度予算案」（いずれも備考欄を除く）を本ページに掲げました。

◆一般会員

印出隆之（篆刻美術館）

植森克昌（奈良国立大学機構奈良教育大学）

増田郁美

◆学生会員

大野紘暉（鹿児島大学大学院）

齊藤正起（大東文化大学大学院）

藤井郁子（関西大学大学院）

※令和 7 年 4 月～12 月に申請された方

## 2026年度 書学書道史学会例会 研究発表者募集要項

企画局

次年度の例会は、左記のとおり開催いたします。会員各位には、日頃の研究成果を意欲的かつ積極的に発表いただきたく、奮ってご応募ください。なお、次年度の例会も外部講師による講演を併催する予定です。

記

- ①開催日／方法：2026年7月12日（日）午後／オンラインによるライブ配信とします。それに応じたIT機器を扱っていただきますので、ご承知おきください。
- ②発表者数／時間：3名程度／各30～45分（発表20～30分、質疑応答10～15分）  
昨年度と同様に、必要に応じ大会での研究発表よりも発表時間や質疑応答の時間を長めに確保し、議論を深めることも視野に入れています。発表時間は右記の範囲で希望者各位と個別に相談させていただきます。
- ③申込方法：Eメールにて左記事務局宛にお申し込みください。件名には必ず「書学書道史学会例会発表申込（※発表希望者氏名を付す）」と明記してください。また本文の冒頭に「所属・氏名・連絡先」を記したのちに、発表内容の題目および発表内容の要旨をレジюме（800字程度）にまとめてご提出ください。
- ④レジюме：原則として、パソコン（テキスト形式、Wordファイル形式のいずれか）で作成し、申込時のEメールに、ファイルを添付して送信してください。
- ⑤申込締切：2月27日（金）必着
- ⑥発表者の決定と連絡：3月下旬開催予定の理事会にて協議・決定し、採否の結果は個別に連絡いたします。
- ⑦レジюме集の公開：5月発行予定の『会報』51号にて公開します。この内容はホームページにも掲出いたします。

## ※注記

・例会の発表者については、学会誌『書学書道史研究』第37号への投稿申込があったものとして扱われますので、改めて学会誌への投稿申込を行う必要はありません。

・学会誌への論文投稿締切は、2027年3月31日となっております。投稿後、原稿掲載の採否は論文査読委員会によって決定されます。

## お問い合わせ先

書学書道史学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル7F（株）毎日学術フォーラム内

メールアドレス：maf-syogaku@navi.jp

FAX：03-6267-4555

## 研究倫理遵守のお願い

理事長

昨年10月に刊行された『書学書道史研究』第35号において、研究倫理に抵触する論文の投稿が確認されました。本会では、投稿時に「書学書道史研究投稿チェックリスト」に基づき、二重投稿・盗用・剽窃をしていないことや、所属機関の倫理規則の遵守、著作権の尊重について誓約いただいております。

理事会では今回の事案を受け、健全な学術活動を維持するため、研究の信頼性向上を目指した指針の策定などを検討しております。

まもなく第36号の投稿締切を迎えますが、書学書道史に関わる研究をよりよいものにするため、会員各位には改めて研究倫理の遵守をお願いいたします。

## 藝術学関連学会連合への加盟申請について

標記の藝術学関連学会連合は、日本学術会議協力学術研究団体として活動する14の学会で構成されるコンソーシアムで、「藝術に関する専門的研究を目的とする専門学会を直接の会員とし、会員学会相互の情報および意見の交換を通して、藝術に関する学問的研究を振興しその発展をはかる」ことを目的としています。主な催事に、毎年初夏に開催される連合の公開シンポジウムがあり、この連合に加わる学会員であれば、無料で参加できます。書に関連する芸術諸領域の研究動向を窺う得難い機会と言えます。

本学会もこの連合に加盟すべく、理事会で継続的に審議を重ねてきましたが、去る10月25日に開催された理事会において、加盟に向けて申請を行うことが正式に承認されました。これを受け、11月6日に当該の事務局へ申請書を提出いたしましたので、ご報告申し上げます。結果についても、速やかに会報・HP等でお知らせいたします。

(副理事長 菅野智明)

## 各局報告

## ◆企画局

次年度の大会・例会について

次年度の例会は、上掲の「研究発表者募集要項」のとおり開催します。

また、大会は10月24日(土)・25日(日)に前橋市の群馬大学で開催します。詳細は次号の会報でお知らせいたします。

(局長 菅野智明)

## ◆渉外局

学会誌34号J-STAGE掲載

3月12日に学会誌『書学書道史研究』34号(2024年10月31日刊行)を独立行政法人科学技術振興機構(JST)運営のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)に登載しました。論文5件のほか、特集「杉村邦彦先生のご功労、講演録、学界展望、書評、新刊紹介」を掲載しています。

各種イベント・学術会議・展覧会・シンポジウム

香港藝術館「香江藏珍—香港三大古書画收藏」、登録無形文化財「書道」特別揮毫会(石川会場)、香港中文大學文物館「北山瑰寶—香港中文大學文物館藏《國家珍貴古籍名錄》碑帖珍本」、春日井市道風記念館「刻された古代日本の書」、観峰館開館30周年特別企画展「王羲之からの手紙—国宝「孔侍中帖」と中国書法名品選—」、東方学会令和7年度秋季学術大会、東洋学・アジア研究連絡協議会シンポジウム「東洋学・アジア研究の新潮流」、日本武道館全日本書初め大展開覧などの情報をご案内しました。

(局長 富田 淳)

## ◆振興局

研究促進助成金制度について

2025年度の募集において、研究計画書の申請が

2件ありました。審査の結果、左記の2件が採択されました。来年度も多数の応募をお待ちしております。

研究代表者：海藤侑里子

研究課題名：近世期における肉筆資料からみる文字表記の変遷

表記の変遷

研究代表者：陳雪濤

研究課題名：平安時代中期における玄宗朝書風の

受容をめぐる諸問題

2024年度採択者(峯岸佳葉会員、浅野泰之会員)の「中間報告書」を受理しました。研究計画を適正に遂行されています。2023年度採択者はいなかったため、「経費執行報告書(含む領収書)」の提出はありませんでした。

学生会員研究発表旅費補助制度について

本学会の大会等に对面参加して研究発表を行う学生会員は、必要とする旅費について本学会から補助を受けることができます。詳細は本学会ホームページに公開しておりますので、ご参照のうえ該当する学生会員の方はぜひご利用ください。

(局長 成田健太郎)

## ◆編集局

『書学書道史研究』第35号の刊行について

2025年10月31日付けで『書学書道史研究』第35号を刊行いたしました。論文6編、第34回大会記念講演録、展望論文、新刊紹介2編を収録しております。ご執筆ならびに論文査読をいただきました各位に厚くお礼申し上げます。

本号も皆さまのおかげをもちまして、充実した誌面となりました。他方で、研究倫理に抵触する投稿論文が1件あり、本事由により不採用となりました。今後公正な学会誌刊行に向けて対応してまいります。

『書学書道史研究』第36号編集に向けて

・投稿申し込みは、2025年12月31日で締め切り(要概要送付)しました。

・「書評」もしくは「新刊紹介」：本誌で取り上げるべき書籍の推薦を随時受け付けております。複数の著作候補が届いた場合には、編集局で対象本を検討して決定いたします。

「投稿規定」「執筆要領」ご確認のお願い

『書学書道史研究』「投稿規定・執筆要領」が一部改定され、第34号より新しい規定に基づいて編集を行っております。詳細は、ホームページで公開しております。投稿に際しては、最新版「投稿規定・執筆要領」および「別紙様式」に基づき様式に沿って原稿をご作成のうえ、締切期日必着でのご送付をお願いいたします。

特に、「論文」「研究ノート」をはじめとする原稿の性格、原稿チェックリストをよくご確認いただき、研究倫理に基づいたご執筆をお願いいたします。また、例年、文字数超過による不受理事例が発生しておりますので、ご注意ください。

(局長 萱のり子)

## ◆会計局

会費引き上げの検討について

いつもご協力いただきまして、誠にありがとうございます。先日の総会で報告いたしましたとおり、ここ数年にわたり赤字決算が続いている状況を受け、会費の引き上げについて検討を進める必要があるとの判断に至りました。先の理事会におきまして、会費引き上げの方向性について審議が行われ、承認を得ております。

本件についての具体的な検討は、来年度の新体制において慎重に進めてまいります。会員の皆さまにはご

負担をおかけすることになりますが、何卒ご理解と協力を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

(局長 増田知之)

### ◆事務局

#### 会則付則の改正について

10月25日に開催された令和7年度総会において、会則付則の改正が承認されました。除籍となる会費未納年数を3年とし、会員資格を喪失した場合においても未納合算額の請求権を学会が有することを明記するものです。令和6年度総会で承認いただきました本則の改正と合わせ、第19期役員会が発足する令和8年4月1日に実施いたします。

詳しくは、本会HP「書学書道史学会の紹介／会則」ページの末尾のリンクよりご覧ください。

#### 会員名簿について

第19期役員選出選挙にあたり、「会員名簿」を発行します。9月には会員各位に登録データのご確認をお願いいたしました。その際にご協力ありがとうございました。選挙関連の発送物とあわせて、来月お届けの予定です。

名簿に関する問い合わせや情報提供は、本会HPの「会員情報変更・退会申込」ページから、または本紙5面の問い合わせ先までお願いいたします。

#### 修了などにより学籍を離れる予定の方へ

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。事務局へお申し出いただくことにより、一般会員資格の付与などが行われますので、今春に学籍を離れる場合は、必ずご連絡ください。

なお、従来の「会員変更申込書」は廃止いたしました。本会HPの「会員情報変更・退会申込」ページから、または本紙5面の問い合わせ先まで、①お名前、②学籍を離れた日、③新しい所属先をお知らせくださるようお願いいたします。

#### 令和6年度事業・活動報告

4月21日 第1回理事会（オンライン会議）

5月15日 第47号《会報》発行及び発送

6月1日 「研究促進助成金制度」申請受付（7日）

6月20日 令和5年度決算会計監査

6月30日 第34回大会発表申込締切

7月7日 第1回常任理事会（オンライン会議）

2024年度例会（オンラインライブ配信）

8月20日 第2回理事会（メール会議）

9月13日 《大会のしおり》《大会レジュメ集》発行及び発送

10月26日 第3回理事会（定例）（於大東文化大学）

令和6年度総会（於大東文化大学）

第34回大会1日目（於大東文化大学）

10月27日 第34回大会2日目（於大東文化大学）

10月31日 第34号『書学書道史研究』発行及び発送

12月20日 第4回理事会（メール会議）

12月31日 第35号『書学書道史研究』投稿申込締切

1月15日 第48号《会報》発行及び発送

2月28日 2025年度例会発表申込締切

3月23日 第2回常任理事会（オンライン会議）

3月31日 第35号『書学書道史研究』投稿原稿締切

令和7年度事業・活動計画

4月20日 第1回理事会（オンライン会議）

5月15日 第49号《会報》発行及び発送

6月1日 「研究促進助成金制度」申請受付（7日）

6月21日 令和6年度決算会計監査

6月30日 第35回大会発表申込締切

7月13日 第1回常任理事会（オンライン会議）

2025年度例会（オンラインライブ配信）

8月20日 第2回理事会（メール会議）

9月12日 《大会のしおり》《大会レジュメ集》発行及び発送

10月25日 第3回理事会（定例）（於奈良教育大学）

令和7年度総会（於奈良教育大学）

第35回大会1日目（於奈良教育大学）

10月26日 第35回大会2日目（於奈良教育大学）

10月31日 第35号『書学書道史研究』発行及び発送

12月17日 第4回理事会（メール会議）

12月31日 第36号『書学書道史研究』投稿申込締切

1月15日 第50号《会報》発行及び発送

2月1日 第18期名簿・第19期役員選挙投票通知発送

2月24日 第19期役員選挙投票締切

2月27日 2026年度例会発表申込締切

3月1日 第19期役員選挙開票

3月8日 選挙選出理事による臨時会議

3月29日 第18期・第19期新旧役員合同理事会（オンライン会議）

3月31日 第36号『書学書道史研究』投稿原稿締切

※なお、総会にて承認いただきました令和7年度事業・活動計画において、「2026年度例会発表申込締切」を誤って2月28日と記載しておりました。謹んでお詫び申し上げますとともに、右の通り2月27日に訂正させていただきます。

(局長 尾川明穂)

- 氏名・住所・電話番号・ご所属・メールアドレスに変更があった方
- 学生会員で学籍を離れた方
- 退会を希望される方

学会HP「会員情報変更・退会申込」ページに、事務局へのメールフォームがございますので、ご利用ください。





## 研究余話

## 班固に関わる石刻二則

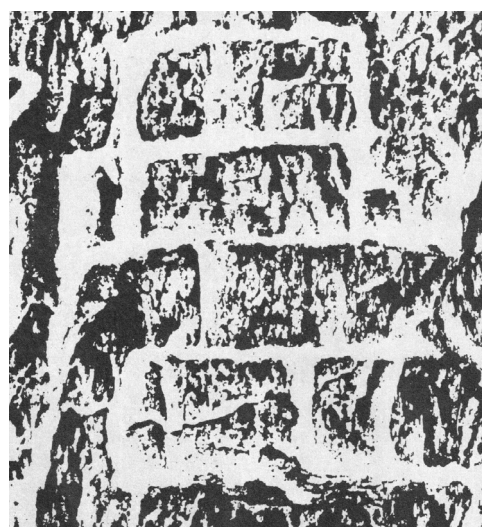
下田 章平

班固(32—92)は『漢書』の撰者として著名である。管見の限りにおいて、彼に関わる石刻資料が二件あるのでここで紹介したい。第1の「燕然山銘」は、後漢の永元元年(89)に竇憲(?—92)が北匈奴を打ち破った功績と後漢王朝の威徳が記された磨崖であり、班固の撰文にかかる。2017年、モンゴル国のドンドゴビ県デルゲルハンガイ(中文表記では中戈壁省德勒格尔杭愛)で発見された。班固は外戚として専横を極めた竇憲に近侍して、この遠征にも従事しており、彼が書丹した可能性もあろう。その後、竇憲はこの遠征によって、朝廷内で権勢を振るったが、その2年後には和帝(在位、88—106)暗殺の嫌疑によって自殺し、班固も連座して獄死した。この銘文には異同があるものの、『後漢書』巻23の竇融伝に附載する竇憲伝や『文選』巻56に収められ、明の董其昌(1555—1636)も題材としている。

近ごろ、高建国、魯朴(小原俊樹)、斉木徳道、爾吉『燕然山銘初拓本』(藝文書院、2022)が刊行され、「燕然山銘」の全貌が明らかとなった。全17行、行あたり12—15字、1字あたり縦6センチ、横7センチ前後の大ききで刻されている。その書は、後漢初期の公用書体として用いられた古隸であり、例えば、字形においても「麓」に見える「鹿」字(図上)は「開通褒斜道



「燕然山銘」「麓」字  
(上掲『燕然山銘初拓本』、6頁)



「開通褒斜道刻石」「鹿」字  
(佐野光一解説『開通褒斜道刻石(百衲本)』、天来書院、1997、17頁)

刻石」(図下、永平9年、66)と共通し、同時代性が看取される。朝廷の威光を示すためであろうか、磨崖の書にもかかわらず、文字の左右への振幅は抑制的であり、謹厳に、そして整然と書かれている。

第2の「爨龍顔碑」(大明2年、458)には、「……班〔班に通ず〕彪は漢記を刪定し、班固は道訓を述脩す。爰に漢末に暨び、爨に菜邑し、因りて焉を氏族とす。」とあり、爨氏の祖として班氏が挙げられている。黄永年「碑刻字(下)」(『書論』第29号、1993、160—172頁)によると、この碑を挙げて、魏晉南北朝時代は門閥を重視し、家柄を高門に仮託したものとする。ところで、なぜ直近の祖を班固としたのであろうか。本碑は四六駢儷文で記され、爨龍顔が劉宋の元嘉7年(432)、趙広が益州で反乱を起こした際に鎮定に加わったことが記されているように、爨龍顔を頌えるとともに、爨氏の望族としての文武を誇示するものであったことが窺われる。班氏は春秋の楚を出自とし、班固は上述のように文武両道に長じた人物あり、爨氏の憧憬の対象となったためであろう。なお、本碑には萩信雄氏の訳注がある(福本雅一編『中国碑帖選』上、玉林堂、1984、349—379頁)ので参照されたい。



## 令和7年度本学会関係者科学研究費採択一覧

## 広報局

- ・学術変革領域研究(A) 新規 T E Iを中心とした高度な歴史テキスト構築 中村寛(東京大学) ※代表: 小風尚樹(千葉大学) 21,970千円
- ・基盤研究(S) 継続(令和3) シルクロードの国際交易都市スィヤブの成立と変遷 農耕都市空間と遊牧民世界の共存 福井淳哉(帝京大学) ※代表: 山内和也(帝京大学) 6,960千円
- ・基盤研究(S) 継続(令和6) 史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立 中村寛(東京大学) ※代表: 山田太造(東京大学) 41,210千円
- ・基盤研究(A) 継続(令和3) 断片的史料情報集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究 中村寛(東京大学) ※代表: 西田友広(東京大学) 4,560千円
- ・基盤研究(A) 継続(令和4) 荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究 中村寛(東京大学) ※代表: 井上聡(東京大学) 4,360千円
- ・基盤研究(A) 継続(令和5) 大型絵図類のデータ構造化と関連史料の連携による南西諸島「海上の道」の復元的研究 中村寛(東京大学) ※代表: 黒嶋敏(東京大学) 11,310千円
- ・基盤研究(A) 継続(令和6) 作品誌の観点による半島由来仏教文物の包括的研究 彫刻・絵画・写経を中心に 板倉聖哲(東京大学) ※代表: 井手誠之輔(九州大学) 11,460千円
- ・基盤研究(A) 新規 書誌学とデジタルアーカイブの融合による仏典デジタルライブラリの拠点形成 中村寛(東京大学) ※代表: 會谷佳光(公益財団法人東洋文庫) 10,920千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和3) デジタル文学地図の構築と日本古典文学研究・古典教育への展開 中村寛(東京大学) ※代表: 飯倉洋一(大阪大学) 2,780千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和4) 前近代日本の「万国人物図」群が示す人種観と世界観に関する総合人文的研究 成田健太郎(京都大学) ※代表: 杉浦和子(京都大学) 2,880千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和5) 近世日本の学知と家伝史料・荻生家旧蔵史料と水戸徳川家旧蔵史料を中心に 金子馨(公益財団法人出光美術館) ※代表: 高山大毅(東京大学) 3,380千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和5) 文化史資料としての抄物の研究 近藤浩之(北海道大学) ※代表: 薦清行(北海道大学) 2,990千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和5) 人文学の研究 方法論に基づく日本の歴史的テキストのためのデータ構造化手法の開発 中村寛(東京大学) ※代表: 永崎研宣(一般財団法人人情報学研究所) 9,780千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和5) 「探究的な学習」の指導ができる小中学校教員の養成方法の開発と効果検証 樋口咲子(千葉大学) ※代表: 小山義徳(千葉大学) 2,730千円
- ・基盤研究(B) 継続(令和6) 中国近世における考証学の発展に関する基礎的研究 近藤浩之(北海道大学) ※代表: 水上雅晴(中央大学) 3,380千円
- ・基盤研究(B) 新規 東アジアにおける「筆墨」の現在―伝統的絵画表現の継承と変容に関する調査研究 板倉聖哲(東京大学) ※代表: 荻井経(東京藝術大学) 4,560千円
- ・基盤研究(B) 新規 中国絵画コレクションの移動と現在 代表: 板倉聖哲(東京大学) 2,880千円
- ・基盤研究(B) 新規 AIを活用した中国木簡の筆跡分析の方途創出 中村寛(東京大学) ※代表: 藤田高夫(関西大学) 5,200千円
- ・基盤研究(B) 新規 中世日本禅宗史料の学術資源化とその応用研究 中村寛(東京大学) ※代表: 岡本真(東京大学) 4,080千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和3) 東アジアにおける書教育に関わる教員養成学構築のための比較研究 草津祐介(東京学芸大学) ※代表: 加藤泰弘(東京学芸大学) 1,300千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和4) 教科通底的な力を養う書写書道教育の実践的研究 教員の「学び」形成を軸にして 萱のり子(奈良教育大学) 360千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和4) 清代の書論における図譜の展開の基礎的研究 高橋佑太(筑波大学) 1,040千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 仮名資料の表記の実態と故実書との相関性の分析に基づく表記意識の通時的研究 家入博徳(フートルダム清心女子大学) 910千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 黒川家旧蔵資料の調査研究―江戸から明治期の「知」の流通と古典の学術体系の解明 家入博徳(フートルダム清心女子大学) ※代表: 江草弥由起(フートルダム清心女子大学) 1,480千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和6) 上古中国語アスペクト研究―有標形式と無標形式が表現する文法的意味 大西克也(東京大学) 910千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 近代日本の炭鉱・遊郭・ハンセン病施設での労働のインターセクショナルティ研究 金貴粉(津田塾大学) ※代表: 徐阿貴(福岡女子大学) 1,880千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 草仮名中字古筆および草書を用いた大学における大字仮名作品制作指導の研究 久保田陽子(岩手大学) 118千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) センシングシステムを活用した手書きメモ取り過程と話の理解に関する実証的検討 鈴木慶子(長崎大学) 2,340千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 「なぜ、理解できないのか」―つまりそのプロセスに関する実証的研究― 鈴木慶子(長崎大学) ※代表: 劉卿美(長崎大学) 380千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 『三國志演義』簡本系版本の成立と分化の過程 中川諭(立正大学) 520千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和5) 近世における入木道の受容と普及に関する書記史的研究 宮本淳子(東京学芸大学) 118千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和6) 坂東本『教行信証』の書写過程と言語の相関を巡る基礎的研究 赤尾栄慶(国際仏教学大学院大学) ※代表: 宇都宮啓吾(大阪大谷大学) 1,040千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和6) 東アジア書教育史的視点からの文字文化の研究と教材開発 代表: 草津祐介(東京学芸大学) 分担: 杉山勇人(鎌倉女子大学短期大学部) 1,080千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和6) 美術商・博文堂の研究―中国書画碑帖の日本流入の実態 下田章平(相模女子大学) 910千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和6) 『エミール』関連手稿群の分析にもとづくルソーの道徳思想形成に関する文献学的研究 中村寛(東京大学) ※代表: 飯田賢穂(筑波大学) 1,170千円
- ・基盤研究(C) 継続(令和6) 『説文解字』における書体の認識 山元宣宏(宮崎大学) 910千円
- ・基盤研究(C) 新規 近代朝鮮における女性書家・書画家の活動とその展開―妓生出身者を中心に 金貴粉(津田塾大学) 1,980千円
- ・基盤研究(C) 新規 小学生の多様な電子的文字入力の実態と、国語習得度との関連の解明 鈴木慶子(長崎大学) ※代表: 松崎泰(東北大学) 2,210千円
- ・基盤研究(C) 新規 康熙年間における正統派文人画の確立過程に関する研究 飛田優樹(公益財団法人黒川古文化研究所) 1,110千円
- ・基盤研究(C) 新規 言語データ連結システムの開発と古代エジプトの言語を対象とした言語記述の実践 中村寛(東京大学) ※代表: 永井正勝(筑波大学) 2,780千円
- ・基盤研究(C) 新規 平安期における天台論議資料の多角的研究 野田悟(高野山大学) ※代表: 道元徹心(龍谷大学) 910千円
- ・挑戦的研究(萌芽) 新規 外見描写と内面評価の相関性史―創発的学際的協働研究 中村寛(東京大学) ※代表: 永井久美子(東京大学) 2,380千円
- ・若手研究 新規 後漢時代中期における楷書萌芽の様相とその形成過程に対する基礎的研究 井田明宏(安田女子大学) 380千円
- ・研究活動スタート支援 継続(令和6) 日本古代の漢文創作における中国文学の受容について―庚信碑誌文を中心に 陳錦清(三重大学) 130千円

\*本会会員の採択課題に限ったが、会員が研究分担者で、研究代表者が非会員である場合には、※を付して代表者を末尾に付記した。複数の会員が関わる同課題に関しては、当該課題のもとに代表者と分担者との併記した。所属の後の数字は、令和7年度のみ補助金の配分額。

なお、事業期間を本年度まで延長した課題については、ここに挙げていない。

## 会報の歩み

広報局

会報50号を記念し、これまでの会報からほぼ1頁以上の記事を掲げました。学会HPに全号のPDFデータが掲載されており、興味のある方はご覧ください。



《書学書道史学会会報》  
第1号  
平成13年（2001）6月発行

## 第1号 興膳宏（きんとく）

西林昭一「Today's Feature」新出土史料の一斑  
古谷稔「書学藻塩草」原本が摸本かの鑑識の方法  
杉村邦彦「随想 先達の思い出」中田先生と鉛筆  
松丸道雄「視点」最古の漢字発見への期待  
新井光風「Today's Feature」〈包山楚簡〉に見え  
る「事」の字形

## 第2号 野中浩俊（のなかこうすけ）

野中浩俊「書学藻塩草」鐵齋の書翰解説  
新編『日本・中国・朝鮮／書道史年表字典』（仮称）  
刊行のお知らせ  
「会告」会則の一部変更について（要請）  
大庭脩「Today's Feature」最近の中国木簡研究  
事情  
藤木正次「書学藻塩草」唐の欽州硯について  
田中有「随想 先達を想う」西川寧先生 生誕百年  
に思う

## 第3号 中村伸夫（なかむのぶ）

中村伸夫「新刊紹介」新知見の宝庫―西林昭一 著  
『中国新発見の書』  
浦野俊則「視点」周金文研究雑感

## 第4号 角井博（かくいひろ）

角井博「随想 真偽問題」晴耕雨読の身に思う  
名児耶明「書学藻塩草」美術史界と寄合書  
河内利治 第5届中国書法史論国際研討会報告  
池田温「視点」書学書道史学会への期待  
興膳宏「追悼」大庭脩先生を悼む  
大野修作「書学藻塩草」エリオットコレクション  
と宋元の名蹟―展から  
高城弘一「Today's Feature」新出の「本願寺兼  
輔集切」  
学会のあゆみ・歴代役員一覧  
木下政雄「視点」古筆切における筆者伝称と書格  
の表示について

## 第5号 石田肇（いしだはるし）

石田肇「随想」筆者体と活字体  
森岡隆「書学藻塩草」古筆復元、原本再構築の試  
み  
事務局「緊急報告」日本学術会議の「登録学術研  
究団体」制度の廃止について  
福田哲之「随想」上海博物館蔵戦国楚竹書『周易』  
の書風

## 第6号 古谷稔（ふるやのぶ）

古谷稔 第15回書学書道史学会大会記念シンポ  
ジウム基調講演「和の心―書の文化継承に向  
けて―」（要旨）  
鈴木晴彦「追悼」藤木正次先生を悼む  
大橋修一「随想」学会15年目を迎えて  
杉浦妙子「書学藻塩草」日下部鳴鶴と彦根  
富田淳「博物館・美術館紹介」東京国立博物館  
中村伸夫「書道史事典」編集完了報告  
澤田雅弘「ノート」瑣事―「宋拓善才寺碑」と王  
澐の題籤・題跋―

## 第7号 横田恭三（よこたきみ）

横田恭三「随想」想定外の範囲外  
笠嶋忠幸「博物館・美術館紹介」出光美術館  
第8号 鈴木晴彦（すずきはるひこ）

鈴木晴彦「追悼」藤木正次先生を悼む  
大橋修一「随想」学会15年目を迎えて  
杉浦妙子「書学藻塩草」日下部鳴鶴と彦根  
富田淳「博物館・美術館紹介」東京国立博物館  
中村伸夫「書道史事典」編集完了報告  
澤田雅弘「ノート」瑣事―「宋拓善才寺碑」と王  
澐の題籤・題跋―

## 第9号 大橋修一（おはししゅういち）

大橋修一 東洋学（アジア研究）連絡協議会の発  
足について  
鈴木晴彦「書学藻塩草」助さんの調査  
古谷稔 理事長就任にあたって  
鶴田一雄「書学藻塩草」大英図書館蔵・敦煌文獻  
の調査について  
森岡隆「私の工具書1」日本書道史の方法  
下野健児「随想」受け手の養成  
萱のり子 第17回大会報告  
魚住和晃「特別報告」第5回書法文化書法教育国  
際会議を開催して  
名児耶明「私の工具書2」展示カタログ・茶道関  
連書の活用  
柿木原くみ「書学藻塩草」高島菊次郎翁と「飲中  
八仙歌」  
山本まり子「投稿」『和漢朗詠集』草手本と戊辰  
切について  
萱のり子 文化の架橋  
浦野俊則「研究余話」削除・改刻された甲骨文字  
菅野智明 第18回大会報告  
「大会記念シンポジウム報告」書学書道史の教育  
の現状と将来  
福田哲之「私の工具書3」写し伝えられた古代の  
漢字たち―徐在国編『伝抄古文字編』―  
河内利治「視点」国際会議の現状と将来  
澤田雅弘「研究余話」国宝と筆法の怪しい関係―  
筆法観の見直しと工房形態解明へのアプローチ  
チー

## 第10号 鈴木晴彦（すずきはるひこ）

鈴木晴彦「研究局」新設へ向けて  
魚住和晃 第19回大会の会場校を経験して  
富田淳「研究余話」題跋識語に見る翁方綱と李宗

## 第11号 鈴木晴彦（すずきはるひこ）

鈴木晴彦「研究局」新設へ向けて  
魚住和晃 第19回大会の会場校を経験して  
富田淳「研究余話」題跋識語に見る翁方綱と李宗

## 第12号 鈴木晴彦（すずきはるひこ）

鈴木晴彦「研究局」新設へ向けて  
魚住和晃 第19回大会の会場校を経験して  
富田淳「研究余話」題跋識語に見る翁方綱と李宗

## 第13号 鈴木晴彦（すずきはるひこ）

鈴木晴彦「研究局」新設へ向けて  
魚住和晃 第19回大会の会場校を経験して  
富田淳「研究余話」題跋識語に見る翁方綱と李宗

## 瀬

中村伸夫「随想」黄賓虹故居のこと

岸田知子「書学藻塩草」些話二題く空海の書をめぐって

池田利広「視点」臨書雑感

第17号 古谷稔 学会創設20周年を迎えて

第18号 鈴木晴彦 第20回書学書道史学会大会を終えて

森岡隆「研究余話」万葉歌最古木簡の発見

菅野智明「私の工具書4」清末文人の日記

第19号 大橋修一 理事長就任に当たって

第20号 信廣友江 第21回書学書道史学会大会を終えて

荒金信治「研究余話」真偽について

萱のり子「視点」身体でわかる「型」の経験

小川博章「随想」河洛古代石刻芸術館

鍋島稲子「随想」蔵番の使命

森上洋光「随想」温故を貫く研究室

第21号 中村伸夫 大震災の中で

第22号 澤田雅弘 第22回書学書道史学会大会を終えて

古谷稔「書学藻塩草」行成の「夢」―『権記』の記事をめぐって―

笠嶋忠幸「視点」世代交代と研究方法

第23号 大橋修一 理事長再任にあたり

第24号 荒金信治 第23回書学書道史学会大会を終えて

安達直哉「視点」書跡文化財はどの地域で保存すべきか

神野雄二「研究余話」山田正平50年忌に寄せて

第25号 大橋修一 書学書道史学会の今

第26号 横田恭三 第24回書学書道史学会大会を終えて

角田勝久「追悼」鶴田一雄先生とのお別れ

永田徳夫「研究余話」日本書論はいつから秘伝書になったのか

第27号 澤田雅弘 こあいさつ

第28号 下野健児 第25回書学書道史学会大会を終えて

萱のり子「シンポジウム報告」伝承と生成のかた

## ち―書学書道史と芸術諸学―

萩信雄「研究余話」読めない文字を読む

矢野千載「視点」北大漢簡『老子』の隷書について

第29号 中村伸夫 復興支援と教育活動

第30号 橋本貴朗 第26回書学書道史学会大会を終えて

佐野光二「シンポジウム報告」講演会「漢隷の成立」要旨

魚住和晃「研究余話」書学領域拡大への願い

増田知之「視点」中朝書法史における比較研究の試み―法帖の刊行を例として―

第31号 河内利治 コンプライアンスと研究倫理

第32号 中村史朗 第27回書学書道史学会大会を終えて

笠嶋忠幸「パネルディスカッション報告」要旨「書学・書道史と美術館・博物館の連携を考える」

杉村邦彦「講演会報告」杉村邦彦氏講演「明治初期の巖谷一六とその書法―新出の『巖谷一六日記』を基にして―」

澤田雅弘 活力

鈴木晴彦 第28回書学書道史学会大会を終えて

辻勝美「講演会報告」辻勝美氏「兼好と書の道」―「徒然草」と世尊寺家の人々を中心に― 要旨

中村伸夫 理事長就任にあたって

中根安治 第29回書学書道史学会大会を終えて

「研究促進のためのクロストーク」若手の研究促進をテーマに

富谷至「講演会報告」富谷至氏講演「中国における書芸術の成立」講演要旨

富田淳 令和の新时代を祝して

富田淳 第30回書学書道史学会大会を終えて

中村伸夫「シンポジウム報告」書学書道史研究の課題

蘇士樹「講演会報告」蘇士樹氏「近百年の中日書法交流について」講演要旨

蘇士樹「講演会報告」蘇士樹氏「近百年の中日書法交流について」講演要旨

## 山本堯「招待発表報告」山本堯氏「殷周金文の復元鑄造」発表要旨

中村伸夫 理事長再任にあたって

成田健太郎「視点」『書きぶり』の捉え方

河内利治 将来構想委員会（仮称）設置に向けて

高橋利郎「視点」文化財としての近代の書

中村伸夫 新たな社会状況の中で

弓野隆之「視点」『揚州八怪』展の開催をめぐって

藤森大雅「書」大東文化大学の書道とデジタル・アーカイブスの公開

笠嶋忠幸 第31回書学書道史学会大会を終えて

将来構想委員会「将来構想委員会」原案の作成と審議の経緯

第42号 河内利治 こあいさつ

矢野千載 第32回書学書道史学会大会を終えて

宮崎和樹「講演会報告」宮崎和樹氏講演「祖父・清六から聞いた 兄 宮沢賢治」講演要旨

横田恭三 追悼 西林昭一先生

萱のり子「書学書道史研究」の更なる充実に向けて

第45号 鈴川宏美 第33回書学書道史学会大会を終えて

古谷稔「講演会報告」古谷稔先生講演「―法性寺流を中心に―」記念講演会報告

成田健太郎 追悼 興膳宏先生

河内利治 理事長再任のご挨拶

増田知之 追悼 杉村邦彦先生

尾川明穂「私の工具書5」文字画像データベースと字典

高橋利郎 第34回書学書道史学会大会を終えて

澤田雅弘「講演会報告」澤田雅弘先生講演「翁方綱「孔子廟堂碑考」検証と補遺」要旨

菅野智明「シンポジウム報告」書の人文情報学

菅野智明 偶感三則

第49号 菅野智明 偶感三則

## 談話室

## 修正線の数

荒金 治

父荒金大琳が雁塔聖教序の原石の写真撮影に成功し、拡大写真を公開して、27年が経ちました。写真の整理など共同で作業を進めることが多かったのですが、褚遂良が修正をしたという点では意見が一致していました。しかし、修正線の判断においては、意見が分かれました。修正線という判断に対して反対派も多かった、誰が見ても納得のいく箇所のみを修正箇所としていたのです。しかし、観察を重ねていくと修正に見える箇所が多いことに気がつきました。文字全体を大きくするという目的を考慮すれば、同時に複数の修正があるということになるのですが、二人の間では何年も議論が続けていました。改めて今思うのは、父が1998年に発表した修正線の数を変えなかった背景には修正線の内容を守りたいといった意識があつたのかもしれない。

## 下町文人の中華趣味

陶 花源

本年、成田山書道美術館では「幕末明治の下谷文人」が開催され、大田蜀山人・亀田鵬斎・市河米庵などの書家の作品が

展示された。江戸末期、長崎港の開港や幕府の儒学政策などを背景として、清末の中国文化が江戸の市井にも静かに姿を現した。書家を個別に研究するだけでなく、彼らのもう一つの側面、「文人」としての姿勢に目を向けることで、その群像をより的確に捉えることができる。

なかでも象徴的な展示作品は、文化13年に制作された、亀田鵬斎・酒井抱一・菊池五山・市河寛斎・市河米庵らによる合作書画幅である。こうした形式は、当時の書家らが中国文化を学ぶにあたって、単に書の技法の学習にとどまらず、生活様式にまで踏み込んだ全面的な受容を行っていたことを示している。本展は文人文化の視角から、江戸期文人書法の一側面を明らかにするものとなっている。

## 日比野五鳳記念美術館へ

中井 希

11月8日、岐阜県安八郡神戸町にある日比野五鳳記念美術館へ行ってきた。五鳳美術館へは春季、秋季展を合わせて年に2回以上、これまでに10回ほど、書作のヒントを求めて、そして、良い作品に出会う豊かな時間を求めて出かけている。

今回の展示で印象的だったのは、故古谷蒼韻先生に宛てた、祝辞原稿とペン字の手紙である。図録でしか見たことのなかった書であるが、ともに、まず、文字が大きい。一文字一文字をじっくりと眺め、その文字造形を味わい、線をたどり、

間合いに心を寄せると、顔真卿の《祭姪文稿》を見たときのような感動に包まれた。五鳳先生の文字造形、自然な行の流れやリズム感は、近寄りたいたが本当に心地良い。

ペン字は、まねようと思っても到底まねることのできない、そんな真趣に富んでいた。

## 真蹟の魅力

西村 大輔

2025年10月、台北市の故宮博物院にて、米芾「蜀素帖」、蘇軾「赤壁賦」、黃庭堅「松風閣詩卷」をガラス越しに幾度も見返し、約四時間その場を離れられなかった。改めて、真蹟に触れることの楽しさを実感した。

私にとっての真蹟の魅力は、「線」と「空間」の二つにある。「線」は、まるでコンサート会場で身体に響く「声」や「音色」のように、先人の息遣いが運筆を通して饒舌に語りかけてくる。「空間」は、刷り物のように省略処理された色相ではなく、「表装」や「紙絹質」といった素材の質感に身体で対峙し、ある種の匂いのような感覚である。美術の教科書で見る「最後の審判」と、システィーナ礼拝堂で能動的に見るそれとが異なるように、真蹟は見る者の「身体性」を伴って初めて立ち上がる。デジタルで名品を容易に閲覧できる時代だからこそ、真蹟にしか宿らないリアルな魅力を、書道教育の中でも大切にしていきたい。

## 編集後記

◆文物出版社から朱明「碑帖述影録」が刊行されました。これまで拓本の新旧を調べるには、『増補校碑隨筆』や仲威「中国碑拓鑑別図典」が簡便でしたが、当該書は民国期の石印本から本邦の影印本、そして近年、中国で出版された影印本までを網羅しており、非常に資料性が高いものとなっています。『近代影印善本碑帖録』（上海書画出版社）とあわせて必携の工具書となりました。（高橋佑太）

◆先日、年末に向けて部屋の掃除をしていたところ、自分の卒業論文と修士論文が出てきました。今では里耶秦簡について研究していますが、当時は伊秉綬の書がテーマ。当時集めていた資料なども一緒に見つかり、懐かしさが込み上げてきたと同時に、改めて論文を読み返すと、今も昔も論拠の弱さはあまり変わっていないと感じ、思わず猛省してしまいました。（村田 萌）

◆檜崎華祥先生が昨年9月29日に長逝された。最期まで筆を握り、新作を世に問い続けた101年だった。書には老いの美学と言いつてもいいだろう。佐理の「頭弁帖」、菰翁の中風書き、越南の墨跡風。書に積み重ねてきた人生の厚みが宿ることは書譜にも触れられている。最期の年の檜崎先生の書にも、狙っては表現することのできない老いの風韻があつた。（高橋利郎）